

県立高等学校を核とする異年齢交流の実践

— 鹿児島県島嶼部における「グローバル教育」活動の試み —

明星大学教育学部教育学科	教授	内田 富男
鹿児島県立喜界高等学校	前校長	田嶋 吾富
鹿児島県立喜界高等学校	教頭	大倉 秀心
鹿児島県立喜界高等学校	教諭	小林 有紀

An Exchange Activity of Different Ages across Islands

— As a “Glocal” Education Centering on a Public High School in Kagoshima —

Tomio UCHIDA
Atomu TAJIMA
Hidemoto OKURA
Yuki KOBAYASHI

1. はじめに

小稿は島嶼部における「グローバル教育」としての異年齢の児童と生徒間における教科外活動の実践報告である。本実践ではグローバル教育の一環として遠隔型国際交流と英語俳句による表現活動を実施した。この活動は鹿児島県大島郡喜界町にある県立喜界高等学校を核とした教育実践の試みである。本稿では実践に至るまでの経緯と問題の所在について述べ、実践の目的及び目標、実践の内容・方法について報告し、最後に本実践をふりかえり、島嶼部における教科外活動について考察する。

2. 実践に至るまでの経緯

日本は島国である。ただし、日本は島嶼国が有する特性（島嶼性）と先進国としての特性を併せ持つ、世界的にも稀有な島国と言える。日本列島は、本州の首都東京や北海道、九州を含む都市部、地方都市、島嶼部（小島嶼地域）から構成され、地方都市や島嶼部の一部はへき地教育の対象となっている。日本でへき地に分類される地域のみならず世界には教育における地域格差が存在し、教育格差は単に狭義の学力（教科学力）に留まらず、教育の機会や意識、情報等様々な面で見られる。

近年の教育社会学の知見によると社会関係資本と教育格差の関係は経済格差以上に児童生徒の教科学力に影響を及ぼすと言われる。社会関係資本（social capital、以下SCと略記）とは「人々の間の協調的な行動を促す「信頼」「規範」「ネットワーク（絆）」（稲葉, 2011）である。教育分野におけるSCについて、露口（2016）『ソーシャル・キャピタルと教育：つながりづくりにおける学校の役割』によると、古くはJ. デューイの『学校と社会 改訂版』（1983）にも見られる。また、本論の主題である島嶼部におけるSCに関する先行研究には国立教育政策研究所における調査事例「離島の教育環境改善に資する社会関係資本形成の規定要因」（豊・高橋, 2019）があり、同研究は「離島という過疎化、少子高齢化、貧困などの課題が顕著な地域におけるSCの形成要因に関するケーススタディとして鹿児島県の奄美大島における調査」で、筆者らは「伝統文化の継承や地域のつながりは、子どもたちの郷土愛を育み、再生産するものの、学力や将来のキャリアプランの必要性に関心が低い」と、結論づけている。一方で、島嶼部における社会関係資本投資

の実践事例として島根県立隠岐島前高校(課題:離島発「グローバル人材」育成のための「地域・社会に開かれたカリキュラム・マネジメント」)があり、島嶼部におけるスーパーグローバルハイスクール事業指定校(文部科学省)による地域活性化の成功事例として広く知られている。

〈喜界島について〉

本実践の舞台となる喜界島の教育状況についてまず見ると、喜界島は小さな島(周囲約50km、推計人口7,000人弱)で、上記の奄美大島と同様、あるいは奄美大島以上に、伝統文化の継承活動が盛んで地域コミュニティのつながりは強い。一方で地域多様性が顕著であり、様々な集落言語や祭り、踊り等の伝統文化も見られる。学校教育の面では人口減少、少子化による学校統廃合が進み、2021年現在、島内の学校は連携型中高一貫校である県立高等学校・町立中学校1校と2つの町立小学校のみである。

喜界島は日本全国の他の小島嶼部にある学校と同様に離島特有の教育課題を抱えている側面もある。例えば、基礎学力の向上、生徒数の減少に伴う課外活動の継続、中高連携のあり方、高校入学に伴う中学生の進学意識、教員の任期サイクルや人員配置、設置主体(県立学校・町立学校)の違いによる制度的・系統的連携体制の教育行政上の問題、地域住民の教育観等、小島嶼部共通の教育課題に取り組む必要がある。

喜界島の学校でも上記の諸課題のいくつかを抱えながら、小島嶼地区の学校としての特徴を活かした教育実践を展開している。喜界島の児童生徒は概して真面目で、礼儀正しく、明るい。一方で、相対的に日本人に見られる特徴と言われる自己表出を躊躇う傾向の強い児童生徒も散見される。ただし、喜界島の学校ではそうした児童生徒を優しい眼差しで見る同級生や先輩、教師による不可視な支援の場面も見られる。在籍数は少数だが移住者や転勤者の子弟、離島留学の高校生もおり、彼らの存在がよい刺激となっている側面もある。また、喜界島は昔から教育熱心な風土が根付いており、島を離れて国内外で活躍する人材も多く輩出していることから「人材の島」と言われる。

町立早町小学校においては郷土教育のモデル校(令和2年度まで)として実践研究が盛んに行われている。連携型中高一貫校である高等学校では、基礎学力の向上等に加え、進路実績は順調で、就職実績に加え、普通科における高等教育機関の入学試験の合格率が年々上昇し、九州・沖縄地区のみならず大都市圏の国公立大学に進学する卒業生の実数が増加し、「離島の進学校」として著しい進学実績が出始めている。そうした背景には小規模校・小規模学級においてしばしば共通して観察される特徴、例えば、生徒・教師間の距離の近さはラポールの形成を加速化し、授業では生徒が発言し易い雰囲気等を醸成している。

しかし、社会関係資本供給の課題もある。前述の奄美大島の例のように、伝統文化の継承や地域のつながりは、子どもたちの郷土愛を育み、再生産する努力がなされており、文化継承に関するSCは豊富にある。一方で、島嶼部の多くの学校が抱えているグローバリゼーションやグローバル時代にふさわしい「水平的多様」な学力(後述)の形成のためのSC不足の問題は明らかである。

3. 問題の所在：グローバル社会における日本の格差

世界中のほとんどの国は、多民族・多宗教国家であり、複文化・複言語社会である。一方、日本は、近代以降、単一の民族・文化・言語として教えられてきた経緯があり、グローバル社会における多様性については「他人事」のような捉え方をしてきたため多様なグローバル社会の意識は希薄である。英米や近隣のアジア圏では、当たり前のように様々な文化・言語が身近にあり、英米ではグローバル教育や多文化教育が正課のカリキュラムに位置付けられているが、日本ではその歴史も浅く、重視されているとは言い難い。従って、教育立国と言われる日本の識字率(literacy rate)は世界の中で際立っているにも関わらず、現代のもう一つのリテラシーであるITリテラシーと並んで、外国語リテラシーは大きな国家的課題とされている。近年は国のリードにより、教育政策、行政等において喫緊の課題対策として教育諸法令の改定や新制度の導入が始まりつつあり、中等教育における広義のグローバル教育は私立一貫校や公立学校のSGHやWWL等の研究指定校が牽引している。

また、グローバル人材の育成は国家的課題から地域的課題へと拡大し、昨今は「グローバル人材」の育成も求められており、一部の研究指定校の問題に留まらない。こうした課題は広く多くの学校に必要な教育課題の一つとなっている。島嶼部の高等学校においてもそうした面で教育機会における格差を生じさせることなく、喜界島のような小さな島の生徒たちが将来、グローバル社会で生きる力を養成することも喫緊の課題となっており、実際、喜界高校のグランドデザインでは教育目標のひとつに「主体的に活躍できるグローバル人材の育成」を掲げている。さらに町教育行政においても「グローバル人材の育成」を謳っている。

4. 実践の目的

本実践において、上記のような背景から教科外活動におけるグローバル教育の一つとして県立高校を軸とした官学連携によるグローバル教育に着手し、島内の小学生を含む取り組みを行った。本実践の目的は、1)異なる年齢の他者との交流を通して自己理解を深めること、2)郷土教育と発信型英語教育の融合によるグローバル教育を通して異文化の他者に伝える態度と知識、基礎的スキルを養うことである。



5. 目標

本実践において、生徒は1)一人ひとりができること、得意なことを活かしながら、活動に参加し、集団に寄与できることの喜びを感じ、グローバルな文脈で自己肯定感を得ること、2)郷土を深く理解し、平易な英語で伝え、簡単なやりとりができること、3)教室内の疑似コミュニケーションではなく、実際のコミュニケーション体験を通して教科としての英語学習の場面で学んだ自らの英語運用能力を理解し、ふりかえることができること、の3点を目標としている。

6. 実践の内容・方法

6.1 鹿児島県立喜界高等学校について

鹿児島県立喜界高等学校(以下、喜界高校と略記)は一昨年に創立70周年となった伝統校で、生徒数は全校で168名(H30.5.1現在)の小さな島の小さな連携型中高一貫校である。同校の経営方針の一つは「国際理解教育を推進し、異文化に対する理解を深めグローバル人材としての資質を養う」ことである。また、同校の教育構想を示すグランドデザインにおいて育てたい生徒像の第一項は「持続可能な地域・社会の発展に主体的に活躍できるグローバル人材の育成」であり、「郷土を愛し自ら人生を切り拓くグローバルリーダー」の育成を目標に謳っている。

6.2 喜界高校を中核とするグローバル人材の育成：島嶼型グローバル教育の展開

本実践の計画は次の4つの活動から構成される。①国際交流活動1、②英語表現活動1、③国際交流活動2、④英語表現活動2の4部構成である。前半(本実践報告)の①は発展途上島嶼国(マーシャル諸島共和国)との遠隔交流会の開催、②は「世界英語」俳句コンテスト(児童生徒と喜界島出身者等社会人)と動画制作への参画であり、後半の③はアジア太平洋島嶼文化交流会(スリランカ・マーシャル諸島)の開催、④は英語俳句朗読コンテスト(奄美群島群島内の生徒と島出身者等の社会人)への参加である。但し、本

報告では執筆時点で終了した前半の2つの活動について報告する。

国際交流活動1：発展途上島嶼国との交流

本実践は直接的交流が困難な地域における遠隔型国際交流の試みで、町教育委員会と喜界高校を軸としたマーシャル諸島との珊瑚島交流の事例である。参加した児童生徒は23名で、町内在住の小学生(11名)と高校生(12名)である。交流相手は、南太平洋に浮かぶ環礁上に建つ島嶼途上国であるマーシャル諸島共和国の首都マジュロ市にあるマーシャル諸島大学(College of the Marshall Islands, CMI)である。パンデミック下でなくとも、物理的に直接的交流は難しい途上国の島である。一方で、マーシャル諸島共和国は多くの離島を有する国で、CMIの講義の遠隔配信が行われており、国内の小離島に暮らす学生の教育保証の役割も担っている。また、近隣の島嶼国にも遠隔教育を供提しており、南太平洋諸国における高等教育ネットワークのハブの機能も果たす。



南海日日新聞8/31付記事より転載

本実践は、官学連携による国際交流プロジェクトで、喜界町教育委員会が小中学生の学力向上施策の一環として実施している「やる気塾」(土曜日開講)の特別講座として実施され、同塾では地元のSCを活用した様々な講座が提供されており、英語講座では従来は英語科教員による英検対策講座が開講されてきた。本年度は、官学連携により「珊瑚島親善交流」が実現した。このZoom会議システムを使った遠隔交流には小学生、ボランティアの高校生が役場の大集会室に集まり、大型スクリーンを通じて英語でやりとりをした。休日にもかかわらず教委やIT担当の役場職員、高校・小学校教員の支援や傍聴もあり、高校生をはじめこうした人々や施設が本実践における貴重なSCとして機能した。一方、CMI側は学内の教室の常設大型TVを通して参加した。幹部教員、学生支援職員、IT担当職員等の支援もあった。離島間の遠隔交流であったため通信状況が懸念されたが、概ね良好で、通信状態は安定しており、技術面の大きな障害はなかった。但し、日本語訛り、マーシャル訛りの英語でのやりとりであるので、お互いに聞き返す場面があった。

特筆すべきは高校生の活躍である。高校生が英語で発信したり、小学生の質問をサポートしたり、高校生が軸となり、異年齢・異文化交流を楽しみながら多くを学んだ。具体的な内容は、初回であるので、それぞれの島の日常に関する情報交換に留まったが、英語の質疑応答の場面では「マーシャル諸島にカブトムシはいるのか?」「好きな動物は?」といった子どもらしい質問から、マーシャル諸島における社会問題(回答:首都への人口集中と離島の過疎化)に至るまで多岐に渡っていた。

英語表現活動1：「世界英語」俳句コンテストへの参加と動画制作への参画

他方、「世界英語」俳句コンテストでは小さな企画ながらも50句が集まり、高校生の参加は25名で、在籍数から見ると多くの生徒が新しいことに挑戦したことになる。英語科教員からは参加への積極的な働きかけはあったものの、英語俳句の作品については生徒の主体性を重視し、添削指導は行わなかった。募集要項では英語俳句について詳細な指示を与えることはせず、テーマは喜界島または珊瑚とすること、形式は英語の3行詩で、季語や音韻については求めずに、浮かんだことを自由に英単語で簡潔に表現することとした。

審査員は国内外の英語使用者または英語母語話者30名で、予備審査は日本在住の25名の英語教師等に依頼した。本審査では「国際英語」の名に相応しく、日本、米国、スリランカ、マーシャル諸島、タイの英語使用者5名に依頼した。このうち英語母語話者は米国の1名のみである。いずれの審査員も無報酬で

あったが、本実践の意義を理解し、30名の審査員全員が快諾してくれた。本活動の成果は、YouTube動画「喜界島『世界英語』俳句コンテスト入選作品集」として<https://youtu.be/mSbeD4FhyHk>で一般公開している。最終的には準備から終了段階まで100名以上の善意の参加者が、本企画に関わったことになる。

7. 実践のふりかえり

生徒の意識や行動の変容は継続的な教育実践を通じてのみ現れる。また、実践の効果や評価については時間の経過とともに変化していく。本章では、そうした観点を踏まえてまず、①の活動については国際交流の直後に書かせた簡単なリフレクションノートをもとに実践の様子からふりかえる。次に②の活動について作品の英語の分析結果を報告する。

7.1 リフレクションノートに基づくふりかえり：意味まとまりの分析から

参加した高校生の感想から本実践をふりかえるために、言語分析ツールを使って意味情報のまとまりである意味まとまり（「意味チャンク」）を抽出し、生徒の感想を集約した。感想には1文に複数の観点から見られるべき情報が含まれる場合が多い。例えば次の例の場合、英語話者との過去経験と「自信をもった」とことと「もっと磨き上げたい」とことという一見相反する気持ちが一文内に混雑して語られているため、分かりにくい。例「今までALTとの会話しかしたことがなかったけど、今回の交流を通して自分の英語力に自信をもつことができ、もっと磨き上げたいと思った」そこで、意味チャンクで区切り、観点別に見ることができるようチャンクを切り出した。以下にその一部を列挙する。

観点1：体験・経験（どのような経験だったのか、経験をどのように感じたのか）

良い経験、貴重な、初めての、たくさん知る、たくさん触れる、普段小学生と、新鮮で、新しい知見、素晴らしい機会、楽しかった、嬉しかった、広げるチャンス

観点2：コミュニケーション（実際のコミュニケーションの内容）

ジェスチャーや、何となく伝わった、伝わって、慣れていなかった

観点3：学習（課題）の気づき（自己課題について気づいた事柄）

課題に気づけ、あまり慣れて、聞き取れなかった、分からなく、抑揚が足りない、難しく、しか知らなかった、英語力

観点4：学習動機（今後の英語学習の動機に繋がるような内容）

もっと英語を勉強、勉強しよう、もっと磨き、自信をもつことができ

観点5：他文化・社会理解（国際交流に関わる具体的内容）

外国の方、他国、国家など、フレンドリーだ、同じサンゴ、身近だ

その他（コロナ下の状況）

コロナウイルス、このタイミングで、コロナの影響、閉鎖的に

今回の国際交流活動は高校生が学校の枠組みを超えて同じ郷土の小学生と関わることにより、「島の先輩」として頼りにされることで、高校生の自己効力感の向上が観察されたこと、思うように英語が出てこないことや聞き取れないことから英語学習の必要性を痛感し、英語学習や英語による自己表現に対するモチベーションが上がったこと等がリフレクションシートから看取できる。

7.2 英語俳句の分析

まず、形式的に見ると、使用語は延べ893語／50句で、種類は377語に集約できる。平均は18語／句となる。英語俳句は3行詩であるので1行当たり6語という計算になる。6語／行は俳句という表現形式としてはやや多い。従来の英語俳句を参考にすると、できれば4語程度の語を厳選して、12語以内／3行で情景や心情を表現したいところである。

それらの語を連続する2語のかたまりで見ると、Kikai Island[jima] (12) が圧倒的に多く使われていることが分かる。喜界島がテーマということで、使いがちだがこの2語は不経済である。sugar cane (4) は、例えば、canes (サトウキビの意もある) でよいだろう。一部審査員は講評を寄せてくれ、そこでも全体的に語数の多さの問題を指摘している。また、blue sky (5) と beautiful sea (4) もよく使われているが、俳句では相手の想像力を期待し、直接的に形容詞で表現することは避けた。その他は the sea (4)、the sun (3)、a dialect (3) も見られ、島の様子を表現しており、詠み手の視線が何に注がれていることが示されている。

紙幅の都合で1句のみ紹介する(原文ママ)。全文20語と長い句で英語の誤りもあるものの祖父母や子どもを大切にする島の風土や情景が詠まれており、評価の高い秀作である。

One summer day grandpa said

The blue sea and sugar cane fields

And children of the Kikai Island are treasure

8. まとめ

国際理解における最も重要かつ基本的資質は、文化相対化の視点をもつことである。自文化を深く理解し、異文化の他者に伝える。他文化に関する基礎知識をもち、他者を理解する。すなわち、自文化の理解と発信、他文化の理解と「響感」を通してのみ相互理解は起こる。本実践の英語俳句ではそれをきっかけにして身近な故郷について見直し、それを英語で発信する機会を得た。また、今回の国際交流では初めての体験であることから、自文化を発信することに精一杯であった。今後は自文化と他文化を相対化する視点を身につけることを期待する。本実践の軸となった高校生にはそうした資質を身につけさせることが今後の課題となる。そのためには英語学習や国際交流を通して、郷土を理解し、発信する多くの経験を積むことが必要だろう。

最後に、互いに質的に異なる様々な存在が、顕著な優劣なく併存している状態、異質であることの価値を認め排除を可能な限り抑制することを、本田(2020)は「水平的多様化」と呼ぶ(『教育は何を評価してきたのか』2020 215頁)。グローバル人材の育成のためにもまさにこうした考え方が不可欠であり、総合的な学習の時間や教科外活動を通して涵養されるべきグローバル時代の水平的多様な学力が正に求められる時代であろう。

本実践計画の全体は活動④の終了をもって一区切りとなる。詳細は別稿に譲り、本稿では活動①、活動②の萌芽的取り組みの報告に留めた。計画のうちの活動③は既に終了し、英語俳句の作品動画の視聴者数も漸次増えており、関係者の関心の広がりが見える。活動④については募集を開始したところである。こうした実践を継続し、発展させることにより、国内外・島内外のSCを有機的に活用したグローバル教育の具体的な取り組みが定着し、「離島の進学校」、遠隔で国際交流ができる「グローバルな高校」として島嶼部の学校の特色作りや魅力化に活かすことができるだろう。また、そうした新しい動きは島内の情報や意識の格差軽減のきっかけとなることが期待される。さらに、いわゆる離島勤務を希望する学生には、学校における社会関係資本としての大きな役割を担う人材であることを考え、地域の児童生徒にとって頼りになる若い先生として活躍することを期待したい。

謝辞

本実践は喜界町教育委員会久保康治教育長のご理解のもと、同町教育委員会池田克則指導主事のご指導並びに実施計画、運営、生徒指導等に多大なるご尽力を賜りました。また、夏目淳一氏をはじめとする同町企画観光課には広報活動等について格別なご支援を頂きました。加えて、島外においては東京喜界会の皆様のご協力を頂きました。同会会員で喜界島花良治出身の英詩人・研究者である郡山直先生(東洋大学

名誉教授)には「国際英語」俳句の本審査に加え、同企画への高い関心と温かい評価を頂戴しました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。最後に、本プロジェクトに参加してくれた児童生徒の皆さんに感謝します。

参考文献

- 稲葉陽二 (2011)『ソーシャル・キャピタル入門：孤立から絆へ』中公新書.
- 喜界町企画観光課編『広報きかい』喜界町役場.
- 喜界町企画観光課編『喜界町町勢要覧資料編 平成30年度版』喜界町役場.
- 露口健司編著 (2016)『ソーシャル・キャピタルと教育：「つながり」づくりにおける学校の役割』（叢書ソーシャル・キャピタル）ミネルヴァ書房.
- 本田由紀 (2020)『教育は何を評価してきたのか』岩波新書.
- 内田富男 (2019)「グローバル時代における離島の教育課題：喜界島の事例」グローバル人材育成教育学会第6回九州支部大会予稿集、グローバル人材育成教育学会九州支部 2019.8.3 宮崎大学.
- 内田富男 (2020)「官学連携による離島間遠隔型国際交流の実践：「珊瑚島親善交流」の試み（中間報告）」グローバル人材育成教育学会第6回中国四国支部大会予稿集、グローバル人材育成教育学会中国四国支部 2020.11.8 広島大学（Web開催）.
- 内田富男 (2021)「世界英語」俳句の試み：グローバル人材の育成を目指して」グローバル人材育成教育学会第8回全国大会予稿集、グローバル人材育成教育学会 2021.3.6-3.7 鹿児島大学.
- コクヨ株式会社 WorMo'事務局 (2019)「離島に見るグローバル教育最前線-後編」<https://www.wormo.net/topics/world/185/>
- 多田孝志 (2019)「グローバル時代の人間形成に資する学習方法、感性、響感教育、教師教育、国際交流活動」『グローバル時代の学校教育』三恵社 396-365頁.